

日本の保育・幼児教育の特質と可能性 —SDGs 達成に向けた課題—

浜野 隆
(お茶の水女子大学)

1

目次

- 1. 生涯発達の基盤としての幼児教育
- 2. 幼児教育と非認知能力
- 3. 「子どもの貧困」の克服に向けて
- 4. 幼児期における親子のかかわり
- 5. 日本の幼児教育の特質
- 6. 日本の幼児教育の政策動向
- 7. SDGs達成のための国際協力に向けて

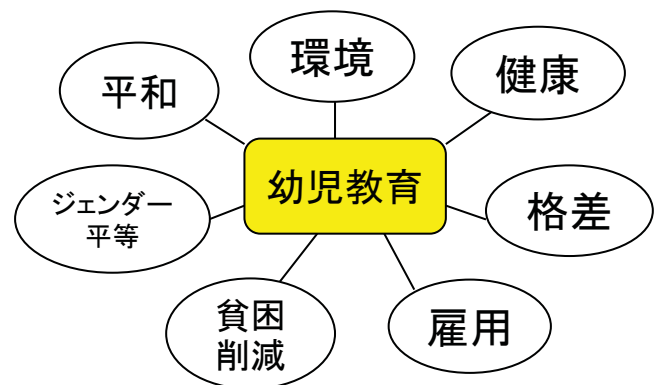
2

1. 生涯発達の基盤としての幼児教育

- 保育・幼児教育は生涯発達の基盤を形成する。
- 教育・福祉・経済・労働など多方面にかかわる重要な領域
- SDGsの諸分野への波及効果も大きい。

3

幼児教育はSDGsの他の開発目標とも関係が深い



4

幼児期の教育

- 日本の教育基本法
- (第11条) 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。

5

幼児教育 = 生涯にわたる人格形成の基礎を培う

- 単なる小学校準備教育ではない
- 生涯にわたる人格形成を見据える
- 公共政策の対象である(国及び地方公共団体による振興義務)
- SDG4が目指す「すべての人にインクルーシブ(包摂的)かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯にわたる学習の機会を促進する」ための「ゆるぎない基盤」づくり

6

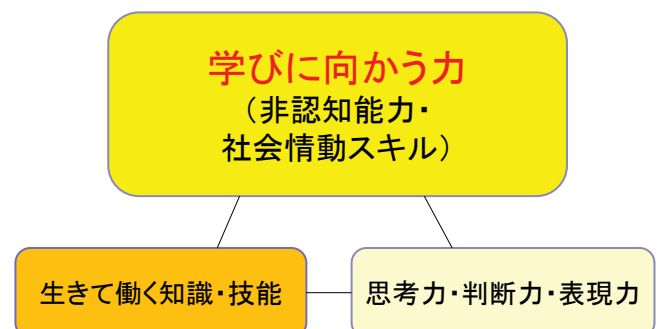
日本の幼児教育に関する主な施設

- 1. 幼稚園(3~5歳)
- 2. 保育所(0~5歳)
- 3. 認定こども園(0~5歳)
- [就園状況]
- 0~2歳児の保育施設在籍率はOECD平均と比べて低いものの、3~5歳児の就園率はOECD平均よりも高い(OECD 2012)。

7

2. 幼児教育と非認知能力

新学習指導要領(小学校)



8

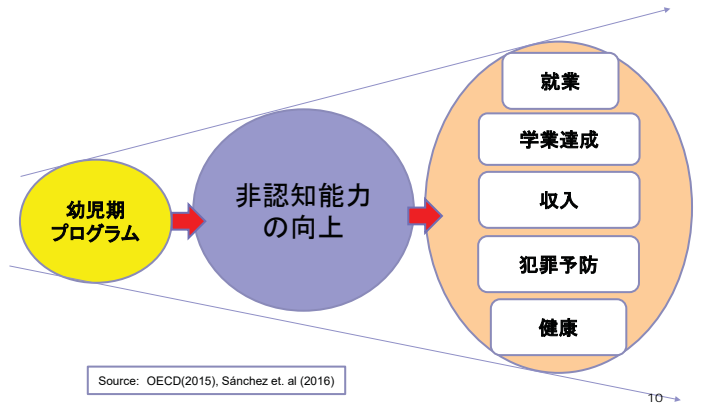
持続可能な社会の創り手を育てる

- **豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手**となるのが期待される児童に、**生きる力**を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしなが、教育活動の充実を図るものとする。その際、児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。
- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) **学びに向かう力、人間性等を涵養**すること。

Source: MEXT(2017)

9

幼児期のプログラムと非認知能力



Source: OECD(2015), Sánchez et. al (2016)

10

社会情動スキルを高める要因

- **気持ちの通い合う人のつながり**
- **いつも変わらずに応援してくれる人たちの存在**
- **安心して戻れる場所**
- **一生振り返ることのできる温かい記憶**
- 「私には、幼稚園時代の様々な楽しい出来事の記憶が鮮明に残っており、今でもふとした時に自然と頭に浮かんできます。・・・私は、「あの幼稚園に通っていたころが自分の原点だった」と思っているのですが、そうした「温かい記憶(warm memory)」だからこそ、長く思い出に残り、折に触れて呼び起こされるのだと考えられます」
- 安西祐一郎(2018)「未来に生きる子どもたちに必要な資質・能力とは」
- (基調講演①:未来に生きる子どもたちのために～社会情動スキルの重要性～:CRNアジア子ども学研究ネットワーク第2回国際会議講演録)

11

3. 「子どもの貧困」の克服に向けて

- 日本は相対的貧困下で生活する子どもの割合(子どもの貧困率)が高い。
- 子どもの貧困問題には家庭への経済支援など様々な領域からの政策が必要。
- 教育支援、とりわけ、幼児期から丁寧にかかわってケアすることが重要である。

12

不利の克服と非認知能力

- 家庭の経済力という「環境」だけで子どもの発達や学力が決まるわけではない。
- 家庭環境の不利を克服している子どもは非認知能力が高い(お茶の水女子大学 2018)。
- 幼児期からの適切な支援によって非認知能力を向上させ、不利の克服を手助けすべきである。

13

親の関与と非認知能力

- 保護者の次のような働きかけは、家庭の経済力の高低に関わらず、子どもの非認知能力を高める(お茶の水女子大学 2018):
- 子どものよいところをほめるなどして自信を持たせる
- 子どもに努力することの大切さを伝える
- 子どもに最後までやり抜くことの大切さを伝える。
- 幼児期においては、①基本的な生活習慣→②学びに向かう力→③文字・数・言葉→④学習態度(ベネッセ教育総合研究所 2015)。

14

4. 幼児期における親子のかかわり

- 幼児期の子どもは家庭で過ごす時間も多し
- 家庭での保護者のかかわり方も重要。
- 日本の全国調査からも、親の子どもへの接し方と子どもの認知・非認知能力との関係が明らかになっている。
- とりわけ、幼少期の絵本の読み聞かせの学力への効果は高い。
- 読み聞かせに関しては、情緒的サポートが重要(浜野 2018)

15

「共有型しつけ」と自己肯定感・語彙能力

- 親との信頼関係が成立している子ども:自尊感情・自己肯定感が高い傾向
- 「しつけスタイル」の研究:共有型、強制型、自己犠牲型
- 親が子どもの気持ちや親子のふれあいを大切に、一緒に楽しい時間を共有するようなしつけスタイル(共有型しつけ)の家庭の子どもは語彙力が高い。
- 親がよく本を読み、家族で団欒の時間を大事にし、親子の会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいる(内田・浜野 2012)

16

難関試験合格者の幼児期:親は思い切り遊ばせた

- 受験偏差値68以上の大学を卒業し、医者、弁護士、検事、国家公務員一種、家庭裁判所の調査官などの難関資格を取った人の親→共有型しつけを取る傾向
- 就学前にとっても意識的に取り組んでいたこと

- ・幼児期に思いきり遊ばせた
- ・遊びの時間を子どもたちと過ごすことが多かった
- ・絵本の読み聞かせをたくさんした
- ・子どもの趣味や好きなことに集中して取り組ませるようにした

内田(2014)

17

5. 日本の幼児教育の特質

- 日本の幼児教育の特徴としては子どもたちが内から発する「主体的な活動・遊び」を重視していることである。
- 言語的な教育指導ではなく、「環境を通した保育」が特徴である。
- 子どもたちが安心して自発的活動に取り組めること、遊び・活動へ「熱中・没頭」する姿を大切にしている。

18

遊びと学び

- 「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」(Course of study for Kindergarten)
- 「遊び」そのものが幼児にとっての重要な「学び」に他ならないとの立場。
- 子どもが発見し発明する可能性を作り出す
- 学習の本質:単なる知識の習得ではなく、新しい知識を生み出す「発見と創造」

19

幼稚園教育要領

- 幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、**環境を通して**行うものであることを基本とする。
- このため、教師は幼児との**信頼関係**を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

Source: MEXT(2017)

20

幼稚園教育要領 第2章

■ 幼児教育の5領域

- (1) 健康
- (2) 人間関係
- (3) 環境
- (4) 言葉
- (5) 表現

Source: MEXT(2017)

22

- 1. 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2. 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3. 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

Source: MEXT(2017)

21

日本の幼児教育の特徴

- (1)発達面として、**知的な発達と情緒・社会性の発達の双方**を重視し、しかもその両面を密接に関連したものととらえている。子どもの**気持ちの安定**を重視し、また他の子どもと**一緒に活動**を伸ばしていく。そこに**いわば埋め込まれた形で知的な発達を促そうとする。**

Source:Ochanomizu University(2006)

23

- (2)生活面の自立を重視し、幼稚園で子どもが行う**遊びや生活の活動の全体を通して**、子どもは発達するのだととらえている。教師は、特定の活動のみならず、子どもの遊びと生活の全般にわたり、指導を進める。しかし、その指導は上から指示を与えるというより、子どもの自発性を引き出すために、活動の示唆を与え、活動に対して助言し、また園での環境に子どもが遊びたくなるものを置くといったやり方を取る。

Source:Ochanomizu University(2006)

24

- (3)教師の専門性を、指導を計画し、実行し、記録し、省察し、さらにまた計画していくというサイクルの中でとらえる。中央政府や園長などが細部まで活動を決定して、教師がそれを忠実に実行するというのではなく、**現場の教師に大きな裁量**が与えられている。国による規定は大まかな方向付けに留まり、その具体化は個々の幼稚園と個々の教師に委ねられる。教師は勝手に子どもの指導を行うのではなく、国による規定の精神を生かしつつ、指導するのだが、その指導過程を記録して、その反省から指導計画を改善していく責務を負う。

Source:Ochanomizu University(2006)

25

- (4)国や自治体の仕事は、主に設備の規準と教師のキャリアの確保、および保育の活動の方向性の決定にある。また、様々な助言や支援の役割を果たす。**幼児教育の現場に近い、また時に教師経験のある人間が行政の中でしばしば指導的な立場**となっている。優れた保育の実践に行政側が注目し、その要点を普及させる働きもする。

Source:Ochanomizu University(2006)

26

- (5)幼児教育の実践と研究の結びつきの近さ
- **保育者養成校における教授もまた現場の教師が移っていることも多い**。その中で、指導的立場になる研究者はかなり現場に精通しつつ、欧米の理論を取り入れ、あるいは心理学その他の類縁の学問の成果を取り入れて、それを現場で実践されている保育の中に組み入れようとする。その努力が日本型の幼児教育の成立と発展を支えてきた。

Source:Ochanomizu University(2006)

27

異年齢でかかわることと「共感性」

- 日本のある保育所：年長児が年少児を抱いて運んだり、トイレで年少児の手伝いをしている
- 異年齢保育における共感性の涵養
- 「幼児同士が世話をするのは危険と思うかもしれないが、この保育所では事故は起きていない。年少児の世話は、子どもの共感性(empathy)を養うことのできる優れた保育の在り方だ」(Joseph Tobin)。

- (Source)柳原洋一「共感性を育む異年齢保育」
- <https://www.blog.crn.or.jp/chief2/01/40.html>

28

6. 日本の幼児教育の政策動向

- (1)幼児教育・保育の無償化
- 日本の幼児教育は公的な財政支出が少なく、保護者の負担が大きい。
- しかし、近年、日本では幼児教育の無償化が進められつつあり、家庭の経済的負担は緩和される方向にある。

29

幼児教育・保育の質

- 幼児教育の無償化：巨額の財源が必要。
- 教育の質を高め、政策効果をあげることが重要
- 構造の質(クラスサイズ、スタッフの教育歴、物的環境など)
- プロセスの質(保育者と幼児のかかわり、子供の夢中度、など)
- 成果の質(言語能力、計算能力、認知能力、社会情緒的発達、非認知スキル、健康など)

30

(2)保育のPDCAサイクル

- 保育の質を向上させるために「PDCAサイクル」「カリキュラム・マネジメント」等の考え方も導入されている。
- 指導計画(Plan)
- それをもとに実践(Do)
- 評価：実践の取り組みと反省(Check)
- 人的配置や対応、環境の改善(Act)

31

(3)幼児教育と初等教育の接続

- 新しい幼稚園教育要領や保育指針・保育要領等では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10 elements of the ideal image at the end of the early childhood period)」が明示されている。
- これは、保育者が保育をする際に考慮するものとされている。

32

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」

- これまでに別のものとして捉えられがちだった、幼児期の姿と小学生の姿をつなげ、子どもたちの成長を連続的なものとして捉える
- 「なるべき姿」ではない
- 「育っているか」「必要な援助は何か」を見るための項目

33

5領域との対応

- 1. 健康: ①健康な心と体
- 2. 人間関係: ②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり
- 3. 環境: ⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚
- 4. 言葉: ⑨言葉による伝え合い
- 5. 表現: ⑩豊かな感性と表現

34

(4) 0～2歳児の保育内容:乳児保育

- 1. 健やかにのびのびと育つ(体との関係)
- 2. 身近な人と気持ちを通じ合う(人との関係)
- (受容的・応答的なかわりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う)
- 3. 身近な物とかかわり、感性が育つ(物との関係)

■ (Source)MHLW(2018)

35

1～2歳児の保育

- 領域自体は3～5歳児と同じ5領域。
- 基本的な運動機能、身体機能、発声も明瞭になる。
- 自分でしようとする気持ちを大切に。

(例)領域「健康」	保育内容(清潔や排泄について)
乳児	おむつ交換や衣服の着脱などを通じて、清潔になることの 心地よさを感じる 。
1～2歳児	・身の回りを清潔に保つ心地よさを感じ、その習慣が 少しずつ身に付く 。 ・便器での排泄に慣れ、自分で排泄ができるようになる。
3～5歳児	身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を 自分でする 。

36

基本的信頼感とアタッチメント

- 乳児期に形成されるアタッチメントの質が様々な「非認知能力」(社会情動的スキル)の発達に影響をもたらす
- 非認知スキルの絶対的基盤としての愛着形成
- 無条件に受け入れられ・愛される経験が自己肯定感につながる
- 「条件付の愛(できたときだけほめられる、いい点とたつときだけ愛される)」ではなく。
- 基本的信頼感→社会性、想像力、思いやり

37

7. SDGs達成のための国際協力に向けて

- 日本の教育協力政策:「平和と成長のための学びの戦略」(2015)
- 「教育協力に求められる内容に関しても、学校教育という枠を超え、就学前教育、職業技術教育・訓練、防災・環境教育、保健・衛生教育といった多様なニーズに応えることが求められるようになり、教育の質の向上と、より分野横断的な取組が必要となってきた」との認識が示され、就学前教育の重要性が認識されつつある。

38

日本の協力の取り組み

- すでに技術協力や研修、拠点構築など、具体的な事業も展開されている。
- 現在、保育研究は国際的にも進んでおり、先進国のトレンドが途上国にもすぐに波及するであろう。
- 途上国の実態とニーズを十分にふまえたうえで、日本の保育の経験や特性を活かした協力活動が展開されることが重要である。

39

References

- ベネッセ教育総合研究所(2015)『幼児期から小学1年生の家庭教育調査』
- 浜野隆(2018)「子どもと絵本を考える」*dandan*, Vol.39, p.35-37.
- 文部科学省(MEXT)(Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)(2017)『幼稚園教育要領』(Course of study for Kindergarten).
- 厚生労働省(MHLW)(2018)『保育所保育指針』National Curriculum of Day Care Centres
- Ochanomizu University(2006) *The History of Japan's Preschool and Care*, Center for Women's Education and Development.
- お茶の水女子大学(2018)『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』
- OECD(2006) *Starting Strong II*, OECD
- OECD(2012) *Quality Matters in Early Childhood Education and Care: Japan*, OECD
- OECD(2015)『社会情動的スキル』明石書店
- Sánchez et al.(2016) *Taking Stock of Programs to Develop Socioemotional Skills: A Systematic Review of Program Evidence*. Directions in Development: Human Development Series. Washington, DC: World
- 内田伸子(2014)『子育てに「もう遅い」はありません』富山房インターナショナル
- 内田伸子・浜野隆(編)(2012)『世界の子育て格差』金子書房
- UNESCO(2006) *EFA Global Monitoring Report 2007*

40